

松本市島内遺跡群 上平瀬遺跡

—緊急発掘調査報告書—



1986.3

長野県中信土地改良事務所
松本市教育委員会

松本市島内遺跡群 上平瀬遺跡

——緊急発掘調査報告書——

1986.3

長野県中信土地改良事務所
松本市教育委員会



上平湖遺跡周辺(1)



上平瀬遺跡周辺(2)

序

この遺跡調査は中央自動車道長野線の建設と時を同じくして高速道関連のは場整備事業島内地区が区画整理工事を施行するに先立ち緊急発掘調査し記録保存すること、なったものであります。

調査の実施は松本市教育委員会に全面的に委託し発掘調査が行われました。

その結果数多くの遺構・遺物の発見・出土を見、地区の歴史を知るうえで貴重な資料となること、思います。

この発掘調査が計画どおり完了できましたことは、県・市・教育委員会の適切なご指導とお忙しい中、調査団に参画され、発掘調査にあたられた皆様のご尽力のたまものと感謝しております。

なお遺跡発掘にあたり計画どおり支障なく調査が行われましたことは、島内上地改良区の役員、地元関係者のご協力とご理解によるものであり心より感謝の意を表します。

昭和61年3月

長野県中信土地改良事務所長 大山忠清

序

島内地区は奈良井川と梓川に囲まれた地域で、かなりの広さに遺跡が分布していることが地元の研究者によって調査されております。

今回、一昨年米の県営ほ場整備事業の一環が島内遺跡群のうち上平瀬遺跡にかかることになり、中信土地改良事務所の委託をうけて市教育委員会により発掘調査を行いました。

調査は稻の取り入れが済んだ11月中半より12月まで寒風の中を約1ヶ月間に亘って行われ、平安時代の住居址と建物址を各2軒検出しました。その内容は後述のとおりであります。

今回の調査については例年のごとく、島内地域の方々の全面的な御協力をいただきました。記して感謝申し上げます。また改良区等関係機関の方々には文化財保護についてご理解いただき、スムーズに調査が完了できました。併せてお礼申し上げます。

中央道長野線の発掘調査も次第に島内地区へ入ってきますが、そのためにもこの調査報告書が活用されることを願っております。

昭和61年3月

松本市教育委員会

教育長 中島俊彦

例　　言

- 1 本書は昭和60年11月5日より12月9日にかけて行われた、松本市島内遺跡群上平瀬遺跡の緊急発掘調査に関する報告書である。
- 2 本調査は松本市が長野県中信土地改良事務所より委託を受け、松本市教育委員会が調査を行ったものである。
- 3 本書の執筆は熊谷康治を中心となって行い、その分担は下記の通りである。

第1章 事務局

第2章 第1節 太田 守夫

第2節 大久保知巳

第3章 熊谷 康治

第4章 神澤昌二郎

- 4 本書の編集は事務局が行った。
- 5 本書作成に関する作業の分担は次の通りである。

遺構	製図、トレース	向山かほる、熊谷康治
遺物	復元、実測、トレース、拓影	土橋久子
- 6 遺物写真は岩渕世紀氏に依頼した。
- 7 出土遺物及び図類は松本市教育委員会に保管してある。

目 次

第1章 調査経過	
第1節 事業の経緯と文書記録	1
第2節 調査体制	3
第3節 作業日誌	4
第2章 遺跡の環境	
第1節 遺跡の立地と地理的環境	5
第2節 周辺遺跡	7
第3章 調査結果	
第1節 調査の概要	11
第2節 遺構と遺物	15
第4章 調査のまとめ	23

図 目 次

第1図 島内遺跡群分布図・位置図	2
第2図 地層断面図	6
第3図 周辺遺跡	10
第4図 発掘調査地区範囲	12
第5図 調査地区周辺全体図	13
第6図 第1号住居址・墓址	17
第7図 第2号住居址	18
第8図 建物址 1	19
第9図 建物址 2	20
第10図 出土土器実測図	21

図 版

巻頭カラー 1空から見た調査地区周辺（その1）

巻頭カラー 2空から見た調査地区周辺（その2）

図 版 1I地区全景・遺構

図 版 2II地区全景・遺構

図 版 3III地区遺構

図 版 4III地区遺構・IV地区全景

図 版 5出土遺物

図 版 6調査スナップ

第1章 調査経過

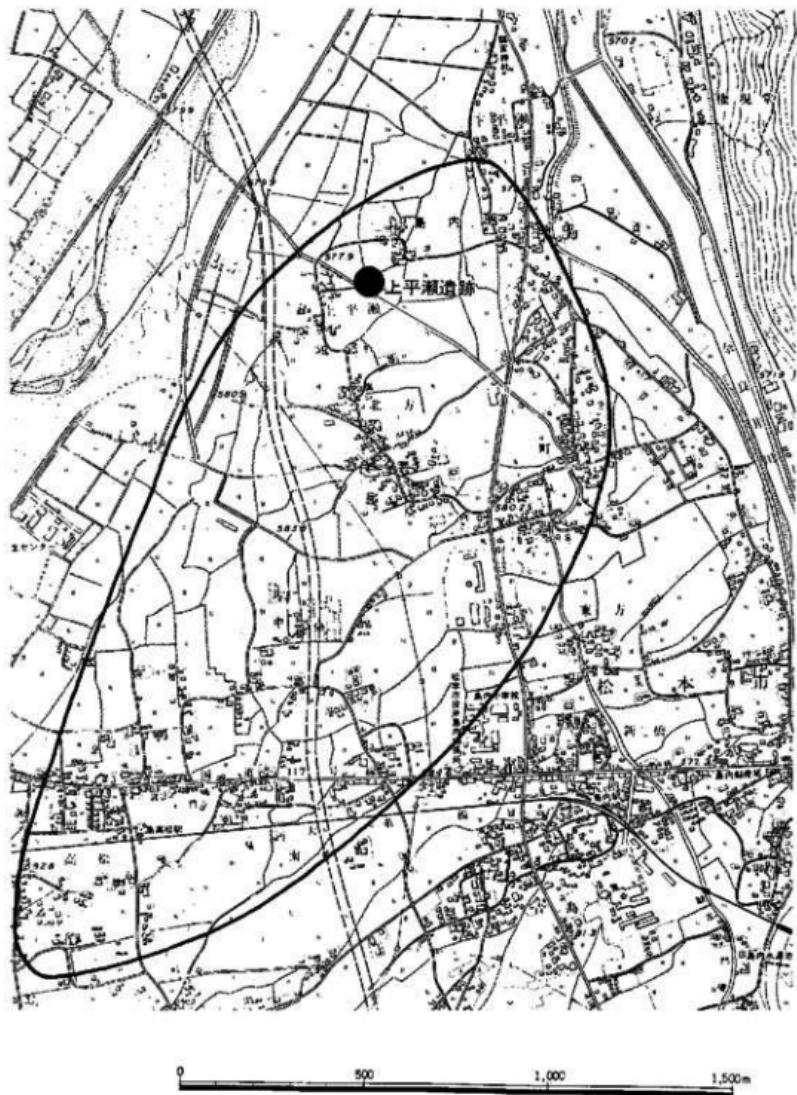
第1節 事業の経緯と文書記録

- 昭和59年7月25日 岩藏文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は中信土地改良事務所
花岡主事、市教委神澤外。
- 昭和60年1月7日 昭和60年度補助事業計画書提出。
- 4月5日 昭和60年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定連絡。
- 5月16日 昭和60年度県當は場整備事業島内地区島内遺跡群埋蔵文化財包蔵地発掘調査委
託契約を結ぶ。
- 4月24日 昭和60年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 4月24日 昭和60年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 5月18日 島内遺跡群埋蔵文化財発掘調査の通知提出。
- 6月17日 昭和60年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 7月25日 昭和60年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。
- 12月27日 島内遺跡群埋蔵文化財取得届及び同保管証提出。
- 昭和61年1月17日 昭和60年度県當は場整備事業に伴う島内遺跡群発掘調査委託契約の変更。
- 2月18日 島内遺跡群埋蔵物の文化財認定通知。
- 2月14日 文化財保護事業執行状況調査。調査者は県教委文化課太田喜幸指導主事。

第2節 調査体制

本年度調査を行うにあたり、昨年度調査に参加した方々を主軸として作業員体制を整え、現場の
担当にあたっては松本市教育委員会社会教育課文化係職員が中心となり、それに市内在住の考古学
研究者、地質学研究者にそれぞれ指導を受けることとした。したがって調査團は下記のように結成
された。

調査團長	中島 俊彦	松本市教育長
調査担当者	神澤昌二郎	市教委、文化係長、日本考古学協会員
調査員	大久保知巳	会社員



第1図 島内遺跡群分布図・位置図

調査員	西澤 寿晃	信州大学	日本考古学協会員
"	三村 肇	会社員	長野県考古学会員
"	山越 正義	生坂中学校教諭	"
"	横田 作重	農業	"
"	太田 守夫	元小学校長	
"	森 義直	大町高校教諭	
現場責任者	熊谷 康治	市教委、文化係主事	"
作業員	安藤 正人	飯島 澄	岩坂 善郎
	高山 淑三	忠地 鼎	堀内 福一
	百瀬 嘉子	矢島 正茂	瀬川 長広
	中村 恵子	臼井美枝子	
			河内ゆり子
			斎藤美智子
			牧垣 源勝
			三沢元太郎
事務局	浜 豊幸 (社会教育課長)	神澤昌二郎 (文化係長)	岩渕 世紀 (係長)
	柳沢 忠博	熊谷 康治	直井 雅尚 (主事)
	阿久沢昌子		高桑 俊雄



作業風景

第3節 作業日誌

- 昭和60年11月5日(火) 晴 資材運搬、テント設営。 作業員：三沢他2名
- 11月8日(金) 晴 調査開始。重機による排土（15日まで継続）。
- 11月9日(土) 晴 昨日の継続。
- 11月11日(月) 晴 昨日の継続。 作業員：堀内（福）他2名
- 11月13日(水) 晴 III区検出作業。 作業員：牧垣他2名
- 11月14日(木) 晴 1住検出。 作業員：岩坂他5名
- 11月15日(金) 晴 掘立柱、土壌の検出。 作業員：高山他2名
- 11月16日(土) 曇 検出継続。III区にトレチ（T₁）設定。 作業員：牧垣他4名
- 11月18日(月) 晴 III区再検出。T₁掘り下げ。 作業員：岩坂他5名
- 11月19日(火) 晴 T₁東半分掘り下げ終了。 作業員：岩坂他4名
- 11月20日(水) 晴 I区検査。溝検出。III区トレチ設定。2住検出。 作業員：岩坂他4名
- 11月21日(木) 晴 建物址1、溝2検出。 作業員：堀内（福）他3名
- 11月22日(金) 晴 2住掘り下げ開始 作業員：牧垣他5名
- 11月25日(月) 薄雲 T₁西半分掘り下げ。2住断面図作成後床面精査。 作業員：牧垣他6名
- 11月26日(火) 晴 IV区及び建物址2周辺検出。T₁掘り下げ継続。 作業員：堀内（福）他7名
- 11月27日(水) 晴 IV区ピット検出。建物址1柱穴半割後上層図作成。 作業員：牧垣他9名
- 11月29日(金) 晴 後半 2住遺物出土写真撮影後平面図作成。IV区トレチ2本設定。 作業員：牧垣他7名
- 11月30日(土) 晴 2住カマド半割。建物址2の柱穴半割。IV区トレチ掘り下げ。 作業員：岩坂他8名
- 12月2日(月) 晴時々雨 土壌1掘り下げ。建物址2継続。 作業員：岩坂他7名
- 12月3日(火) 晴 墓址半割後土層図作成。1住床面精査。建物址2十層図作成。建物址1・2写真撮影。 作業員：堀内（福）他10名
- 12月4日(水) 晴後雨 資料整理。全体図作成。 作業員：牧垣他3名
- 12月5日(木) 晴後晴 T₁土層図、建物址1、2、1住、墓址平面図作成。全体図継続。 作業員：牧垣他5名
- 12月6日(金) 晴一時雨 全体図継続。作業終了。 作業員：堀内（福）他4名
- 12月7日(土) 曇 資材片付け。テント撤収。 作業員：大出他2名
- 12月9日(月) 曇時々雪 資材撤収、運搬。 作業員：瀬川他2名

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の立地と地理的環境

1 遺跡の位置と周辺の地形

本遺跡は、松本市島内上平瀬の水田地域にあり、南側は北西流する勘左衛門せぎに沿っている。海拔凡そ580mに位置し、地形上は梓川扇状地はん瀬原の末端に当り、現河床（遺跡西方）とは約500mしか離れていない。

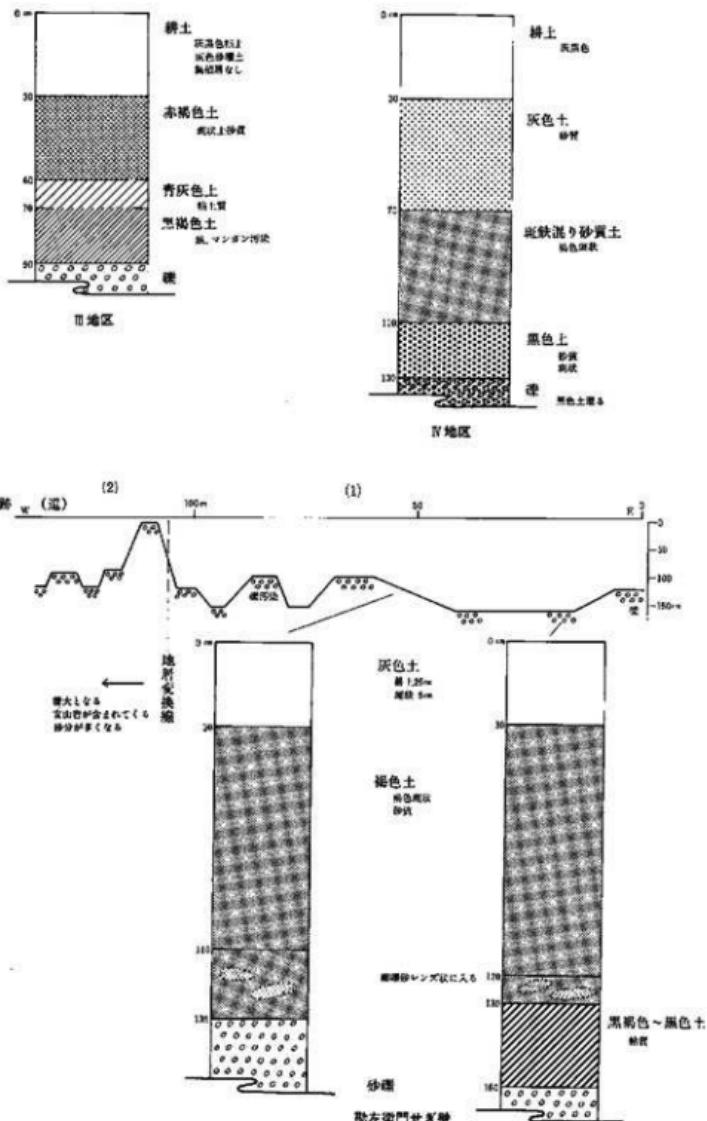
遺跡ののる地形面は、現河床に続く面と約1mの段差をもち、形成期を異にしている。遺跡ののる地形面については、既に松本市文化財調査報告No.36松本市島内遺跡群（北方遺跡・南中遺跡）に述べたように、高松付近を頂点とし上平瀬・町を末端とする、自然堤防状の高まり（走向N40°~50°E、傾斜 $\frac{8}{1000}$ ）である。島内地区の平地の遺跡群は、ほとんどこの自然堤防上の地形面にのっている。昭和58年発掘の北中遺跡、昭和59年発掘の北方遺跡と今回の上平瀬遺跡は北西側に当っている。

2 遺跡の堆積層と礫（第2図）

遺跡ののる地形面は、南方（500m）に当る北方遺跡から続く平たん面で、傾斜は更に $\frac{5.9}{1000}$ と緩くなっている。この地形面の西方は10数mで現河床に続く面（旧河川敷、戦後開田されたが、現在は場所舊のため砂礫地）となり、間に1m前後の小崖がみられる。東方及び東南方向は、北中、北方から続く厚い土壌の堆積層の水田域で、北西へ開く緩い凹地を挟んで町に対している。この凹地は自然堤防状の地形面を切って、町・平瀬川西の側に小崖をついているので、町・平瀬川西の集落は低い台地上にある。また、この台地の形成は、西集落の東側にある数mの奈良井川段丘崖や、奈良井川の浸食活動とも関係をもっている。

本遺跡の堆積層は北方遺跡の場合と同じく、上部に耕土を含む厚い土層と下部の礫層からなっている。上から耕土（灰黒色粘土、灰色砂壤土30cm）、赤褐色土（斑状砂質30cm）、黒褐色土（鉄マンガンの汚染20cm）、砂礫層の順である。斑鐵層や集積層には鉛層はない。土壌深度は遺跡内でも違い、Ⅳ地区中央部の90cmに対し、Ⅳ地区東部では130cm・160cmで下部砂礫層に達する。Ⅰ地区西部では下部砂礫層まで20~50cmで一定せず、現河床に近づくほど土層は浅くなる。

地下構造の土層と砂礫層の状態を、勘左衛門せぎの壁の断面でみたのが第2図である（現在せぎの改良工事中）。これにより堆積層を分類すると、(1)土壌深度120~160cm、(2)同80~120cm、(3)同20~50cm、(4)現河床に続く層となる。本遺跡は(2)と(3)にわたっているとみられる。(1)~(3)の堆積層の走向はN40°~50°E、(4)の堆積層の走向はN40°Eである。



第2図 地層断面図

耕土（水田）の下には、数本の薄い砂礫層がほぼ直線状に走っていて、その走向はN50°E前後、自然堤防の走向と一致している。恐らく遺跡周辺の上部層堆積時の流れの方向を示しているものとみられる。またこの堆積層は、遺跡の遺構により切られているので、遺構以前のものと考えられる。礫の大きさは、小細礫で中礫を含んでいる。

これらの流れの中にあって、II地区中央部の西端に走向N50°Eの溝が発見されている。砂質粘土の詰った幅1m、深さ60cmの桿状の溝の中に、幅35~50cm、深さ30cmのこれも桿状の溝ができ、砂・細礫が堆積していた。ほぼ直線状で、砂層は一般に汚れがなく連續し、一部の底に鉄分の汚染がみられた。他の帯状の砂礫層とは明らかに異り、人工の構と考えられる。

堆積層に含まれる礫は、上層、下層とも梓川系統のもので、砾岩（硬砂岩）、花こう岩、チャート、粘板岩で、これに安山岩が入ってくる。礫径は、下層では最大が35×20cm位で、最多数は小・中・大礫、これを細礫が埋めている。上層は既に述べたように小・細礫が多い。

3 遺跡の立地

本遺跡は、北中遺跡や北方遺跡と同様に上層に厚い土層をもち、水利が加われば最も上の耕地といえる。堆積層で見る限りは、梓川のその後のはん澁はみられない。町や平瀬川西との間の凹地形は、この堆積層（自然堤防）形成の最終期にできたもので、流れの移動により、町・平瀬川西地区が台地状に残されたものであろう。島内遺跡群の遺構や住居跡はこれらを切って存在するもので、これらの地形（堆積層）の形成後と考えられる。

島内遺跡群の自然堤防状の地形面、町・平瀬川西の台地（段丘面）の形成は、南栗・北柴段丘面、宮瀬段丘面とともに奈良井川や梓川の堆積・浸食と相互関係があって興味深く、遺構・遺物の出土とも関係をもつが、今は割愛する。

第2節 周辺遺跡（第3図）

松本市の西北部に位置する島内は、西に安曇と境する梓川がほぼ北東方向へ斜行しながら流下し、南は梓川より分流する博木川の南沿線に、帯状の地を残して島立と接し、東は奈良井川右岸東側の、城山山脈の一部にくい入るかたちで郷ヶ崎～西田、更に北は田沢と境している。平地部は島内の主体部をなすもので、いわば梓・博木・奈良井の三川に囲まれた三角形の島状を呈し、沖積の堆積層を厚くしている。

城山の北に続く大飼山から平瀬、山田地籍の山麓、山腹地にかけては、古くから遺跡の存在が知られ、昭和30年前後の信濃史料考古編集録時点でも、石器、縄文、古墳、古窯址、土師器、須恵器などの遺物、遺構出土地が確認されている。しかし島内の平地部は、河川の氾濫原との見方がなされ、古代にさかのぼる遺跡はないだろうとの見方になっていた。その後、半地部における遺跡の分布調査により、氾濫からまぬがれた地に遺跡の残存していることが明らかとなる。その調査

結果によると、面的なひろがりをもつものとして、大別、高松、南中、北方、平瀬の4遺跡にまとめることが可能かと思われる。このうち平瀬は上平瀬と下平瀬の両地区にまたがり、更に平地部と山地部とに輪郭をとることができる。今回、発掘調査された遺跡は、平地部の上平瀬地籍に含まれるものである。

今回調査された遺跡を中心とする、島内地区内の環境遺跡を、人類の足跡に従いその上順から紹介すると次の如くである。

山地部の山田稻千原からは、旧石器時代の尖頭器（ポイント）が出土している。黒曜石製の完形で、長さ10.5cm最大幅4cm、厚さ1.4cmを示し、木葉形両面加工の調整をよくしている。単独出土であるため、遺跡というより狩猟時に使用されたものがこされたものであろう。この様な尖頭器の単独出土例は、同じ城山山系より石器の形態こそ異なるが、塩倉や蟻ヶ崎の木沢西からも出土しており、岡山系が獵場的な性格をもっていたことが知れる。

稻千原からは縄文時代の打製石斧も数点出土しているが、伴出土器等の採集がないため、所属時期は不明である。同じ山田のわざかばかり南へ寄った大峰からは、縄文前期後半の諸磯式土器片の出土が知られているが、詳細については不明である。更に南方に位置する老松田からは、縄文中期より後期にわたる遺物が出土している。土器としては、中期初頭様式から後半の曾利式相当土器が主体をしめ、後期の壙の内式類似土器まで認められる。土偶、土製円板などの土製品も出土しており、石器としては、石鎌、打製石斧、磨製石斧、凹石、磨石、石皿、石匙、石錐、それにいわゆる尖頭器形石器があげられ、鋸歯形有孔玉器や石製模造品等が出土している。小丘陵地帯の立地であるが、遺物は濃密の感がある。

松本市宮潤本村二つ塚や宮潤、蟻ヶ崎地籍の城山腰からは、弥生中期より後期におよぶ遺跡があり、宮潤本村遺跡では近年の発掘調査で、多数の住居址や出土遺物が検出され、文化の様相を知らしめている。島内地籍にあっては、平地部が安定しない氾濫原であるためか、現在時点では弥生期の遺跡は確認されていない。

古墳時代に入ると、下平瀬川東の泣坂上に後期古墳が築造される。明治35年の様ノ井線開通前は10基程の存在が知られているが、現在は完存1、破壊3の4基となっている。6世紀代から7世紀代にかけての古墳群といえるだろう。その他に山田老松田山頂に1基、平地部の高松本村に1基いずれも後期古墳が確認されている。下平瀬権現堂地籍からは、古墳ないし経塚とみられる出土遺物が知られている。しかし発見時の詳細、遺物の行方など不明である。

山田の古屋沢や隣接する岡田中の沢にかけては、須恵器の古窯址群が発見されている。山田地籍には10数基が確認されたものの、その多くは破壊消滅している。岡田地籍の発掘事例からおよその年代を推考するとき、初窯は平安初頭前後、終末は鎌倉初期頃までと思われる。

平地部の面的なひろがりをもつ、4遺跡の特徴的な性格に概略ふれると、(1)、高松遺跡、土師器、須恵器、灰粧陶器、内耳土器など遺物出土が濃密に認められたのは、高松本村と本郷であった。

いすれも現在集落と重複しており、個人小開発や農耕の折などに発見されている。本村の場合、立石に後期古墳が発見され、馬具、鉗、直刀、小形瓶などの副葬品が出土しているが、他にも同類古墳が周辺に存在した形跡が認められている。(2)、南中遺跡、段丘面上の縁辺と中沢塚の同様に分布している。比較的広範におよぶが、遺物出土はややうすい感がある。土師器、須恵器、灰釉陶器、内耳土器など古代～中世におよぶものがあるが、更に巾崎からは砥石、黒釉陶器、雨ヶ戸から黒曜石、道添から瓦器、舞台塚から敷石遺構などの伴出が認められる。昭和59年の発掘調査箇所は、結果として古代集落からはずれた場所であったと推考される。(3)、北方遺跡、南は益海渡、北は上条を結んで遺跡分布範囲は広く、遺物の濃密度も高い。昭和59年、遺跡の一部が発掘調査され、平安期の堅穴住居址4、中世住居址1、土壙群、溝状遺構等とこれらに伴う遺物が得られた。西隣接の中央道長野線敷地内に中心をおく、古代集落の東縁をしめる地帯である。(4)、平瀬遺跡、(平地部)、上平瀬地緒では今回発掘調査された遺跡のみである。この遺跡は去る昭和23年および同39年12月の2回にわたる、地主の水田床地下げのさい発見されたものである。その後、約10年経た時の筆者の調査によれば、同田より焼土や木炭化物が2箇所に濃密な分布をみせ、敷石遺構があり、土器類の破片が鬼いざるへ何杯も出土したとの地主談をきく。その内、完形の須恵器が島内小学校へ寄贈されており、糸切平底の环3個、高台付高さ20cmの壺1個を認めたが、いずれも胎土、焼成良好の色調の明るい精製土器であった。今この逸品は行方知れずである。下平瀬本郷には平安期にすでに存在した古刹法住寺址があり、寺村地緒にかけて古代～中世の遺物を多出している。特に寺址からは布目瓦、青磁合子、磁器、鐵滓、内耳土器などを認める。(山地部)、前述の如く、旧石器、繩文、古墳、古墳群などの他、中世山城、諸城などの遺構がのこる。

島内地区遺跡一覧

島内遺跡群

高松遺跡	本郷山崎・くね添・川端・道添・本村とひ田・立石・島馬松
南中遺跡	賀添・宮の東・隈ヶ下・道添・次郎田・芝草・はしご田・島塙・舞台塚・樺現田・堀添・巾下・巾崎・島内小学校敷地
北中遺跡	古御堂
北方遺跡	八塚・益海渡・上條
上平瀬遺跡	上平瀬跡左衛門塙北
平瀬遺跡	下平瀬・寺村・本郷・宮の前・十ヶ塙下
山田周辺の遺跡	下平瀬・寺山白鳥・城山・馬糞原・山田諸ヶ米洗場・イカリ・島居山入口・島居山・西畠・老根田・高野南座・福千原・老平・古屋沢・芥子坊主北畠・樺現堂・下平瀬泣坂



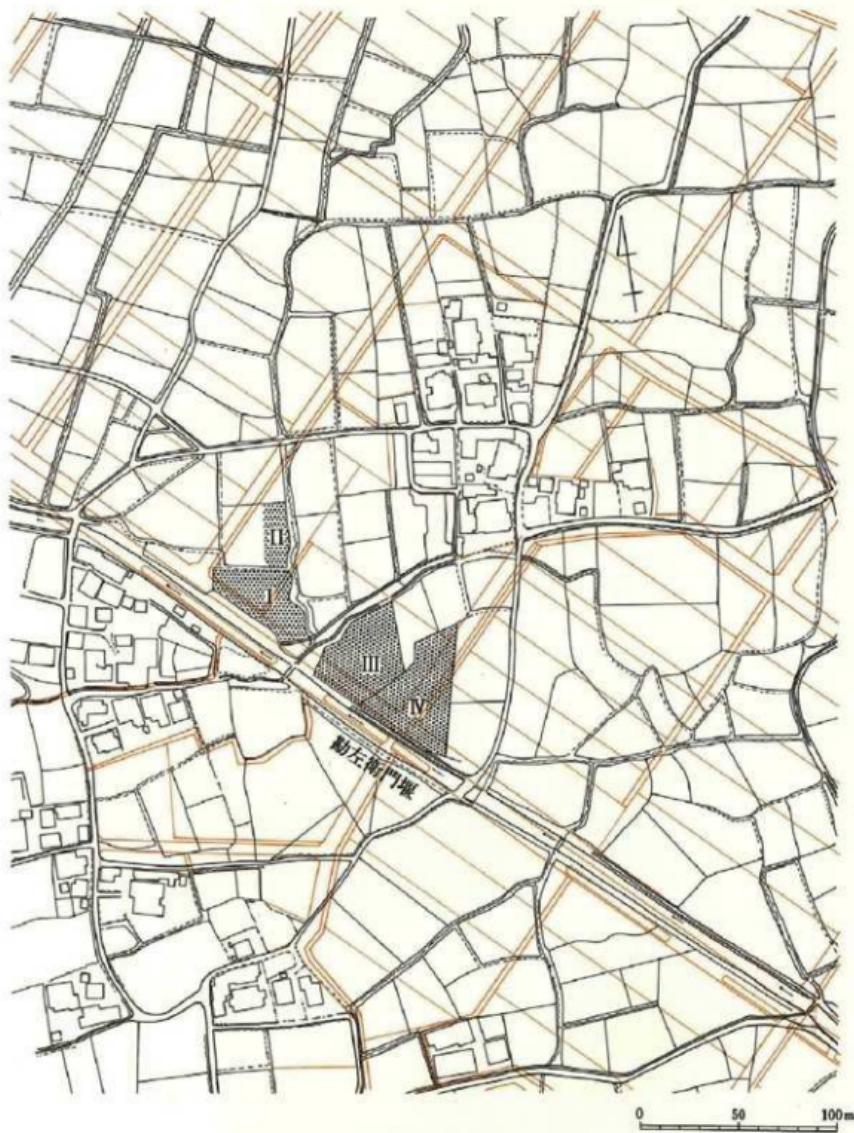
第3図 用辻遺跡

第3章 調査結果

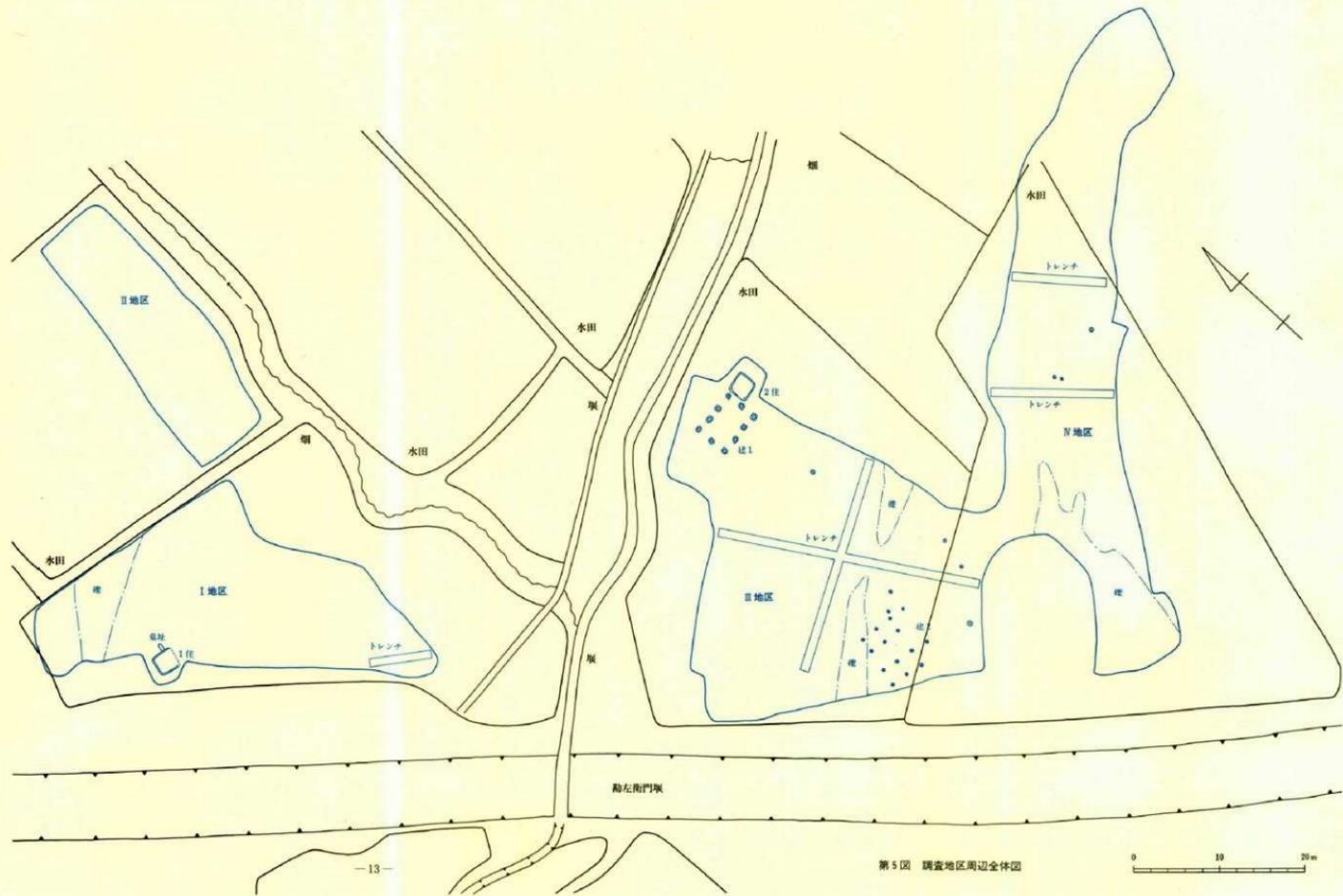
第1節 調査の概要

上平瀬遺跡は島内遺跡群内北端に位置し、現在の上平瀬集落周辺に分布する。集落の北側は古い梓川の流路となっており最近まで荒地となっていた。近年開田をした時、近くの水田の床下げをして上を取り耕作土とした。この際、遺物の出土を見ている。地元の方から当時の話を聞くと、かなり多量に須恵器、土師器が出土し、なかには完形の須恵器壺、壺等5、6点が出土したということであるがこの遺物の所在は現在不明である。

今回の調査地区は以前の遺物出土地点の周辺にI～IV地区を設定した。南側に勘左衛門堀がありこの周辺は床下げがされていないため微高地状を呈している。調査面積は3100m²である。I地区は以前の遺物出土地点に最も近く同一地形上であるが、遺構は竪穴住居址1軒と墓址1基であった。検出面は地表から40～50cmで、鉄分を多量に含む黄灰色土で部分的に砂層及び砂礫層が入る。検出面には須恵器片、土師器片などが見られたがかなり摩滅が激しい。II地区は、I地区の北側に位置するが床下げをした水田であるので耕作土の下は直ぐに砂礫層及び砂層で、遺構、遺物は確認されなかった。III地区はI地区の東側に位置し、確認された遺構は竪穴住居址1軒、掘立柱建物址2軒、他にピット8である。検出面上の遺物はI地区ほど多くない。IV地区はIII地区の東側に位置し、確認された遺構はピット3のみである。検出面は地表から50～60cmで鉄分を多量に含む黄褐色土で、南側は疊層となり北側に深くなっている。検出面での遺物は北側に多い。



第4図 発掘調査地区範囲



第2節 遺構と遺物

第1号住居址（第6図）

I地区の南側西寄りに位置し、北側にある墓址を切る。東壁側は礫となるので不明であるが、230×260cmの方形を呈するものと思われる。検出面が地表より約25cmで他より一段高い位置に確認された。このため耕作等による破壊を受けており、残存部はわずかで壁の残存高は10cm前後である。覆土は粘質の暗灰色土であり、床面は黄色土粒を含む暗茶褐色のやや粘質土であるが軟弱で、東側は礫層が出ている。遺物は覆土中に土師器片が1片出土したが、小破片のため器形は不明である。床面上からの出土はなかった。カマドについては不明であるが、住居址内西側床面付近に焼土粒と炭化物がごく僅かに認められた。柱穴についても不明である。

第2号住居址（第7図）

III地区の北端に位置し、建物址1に隣接する。検出面は表土より約50cmで、全面に鉄分を多量に含んでおり覆土との差が微妙なため、検出が非常に困難である。覆土は茶褐色の粘質土で、上面は検出面と同様鉄分を多量に含む。平面形は、260×250cmの方形を呈し、壁の残存高は40cm前後である。カマドは、西壁やや東寄りに構築され、石及び若干の粘土を使用していたと思われる。粘土はやや黄色土が混る茶褐色土であるが、植物質等の混入物は確認できなかった。カマドの保存状態はほぼ良好であるが、焚口周辺がやや壊されていた。床面は、黄褐色土が混る暗茶褐色土で、非常に軟弱である。カマド付近及び住居址中央部の覆土中に、10~30cm大の円礫が見られた。円礫は、火を受けて割れており脆いものがある。また、ほとんどの右は床面より10cm程高い位置にあり、カマドの焚口を寒いでいるように見える。柱穴及びピットは確認されなかった。遺物の出土はごく僅かで、覆土中に須恵器环、土師器甕の小破片と、床面上に土師器小形甕、カマド内より土師器小形甕片が見られたのみであった。カマドの袖は、長さ約80cm、巾20cm前後であり、壁外へやや張り出していたが葬道は確認できなかった。

掘立柱建物址1（第8図）

III地区の北端に位置し、2号住居址の西側に隣接する。規模は、3間×2間(580×430cm)の隅柱式である。柱間隔は、南北方向で200cm、東西方向で160cmを測る。柱穴の形状及び規模は、全て方形または長方形を呈し、大きなもので60×60cm、小さなもので52×52cm、深さは30~45cmである。 P_3 、 P_7 の内部に径5cm程の小穴があり、数はそれぞれ4個で、内、 P_7 の1つは南側壁上斜めにあけられており、配列は不同であって、人為的なものかどうか不明である。

掘立柱建物址2（第9図）

III地区の西側東寄りに位置する。規模は、3間×2間(620×410cm)で総柱式である。柱穴の形状及び規模は全て円形を呈し、径23~30cm、深さは12~32cmを測り、全体的に見て小さ目である。

覆土は比較的かたく、黄褐色土粒が混る青灰色粘質土で、柱痕は確認できない。柱間隔を見ると、東西方向で北側が狭く140cm前後、南側が170cm前後、中央は広く250cm前後を割り、南北方向はほぼ同間隔で170cm前後を割る。遺物については、柱穴内からは見られず、周辺から土師器・須恵器の小破片が出土したのみである。

その他、この建物址の東側に、同規模のピットが4基確認されたが、配列が不同であるため建物址に伴うかどうか不明である。

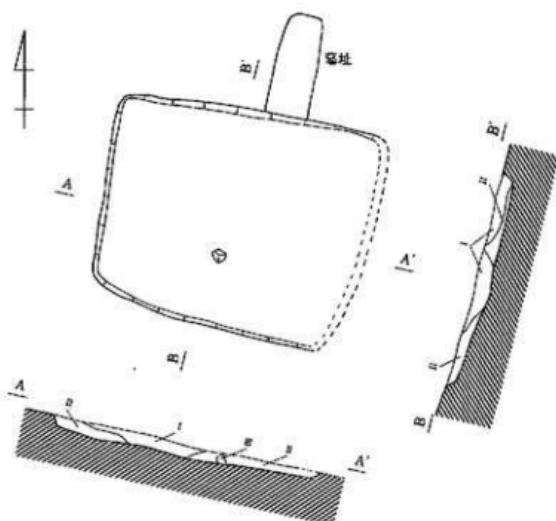
墓址（第6図）

I地区の南側西寄りに位置し、南側にある第1号住居址に切られる。平面形は、南北に長い長方形を呈し、規模は巾40cm、長さは100cm以上とみられるが、南側を1号住に切られているため全容は不明である。1号住居址と同様、耕作中の破壊により残存部は僅かである。底部まで深いところでも4cm、浅いところでも2cm程度しかなく、ほとんどが破壊されている。1号住居址床面との差は約10cmである。内部には6~20cm大の石が入っており、全てが火を受けて焼け、焦れている。底部は、ほぼ全面焼土で、厚さは南側で2cm、北側は焼土粒がわずかに混入している。焼土内に焼骨片が確認されたが、少量・小片のため種の判定は困難である。遺物は、土師器の小破片1点のみである。

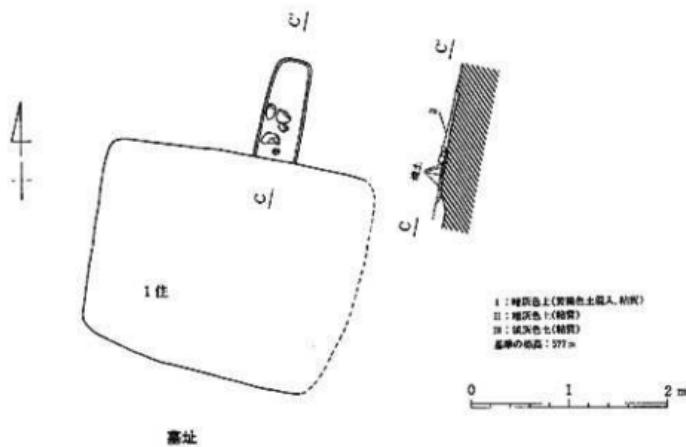
出土遺物（第10図）

出土遺物は全部で100点にもみたなく、そのほとんどが土師器・須恵器であり、内耳土器片が一点混じるのみである。器形は図示したものの他は、甕の破片が多く、他に横瓶と思われるものが一点ある。全体に破片は摩れており、河水による移動も考えられる。時期的には平安時代のものが中心であろう。

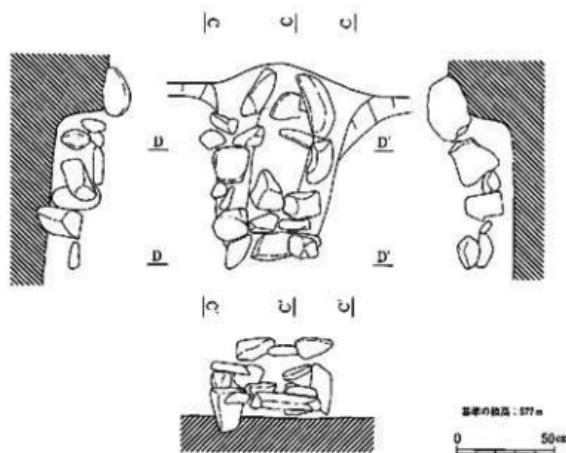
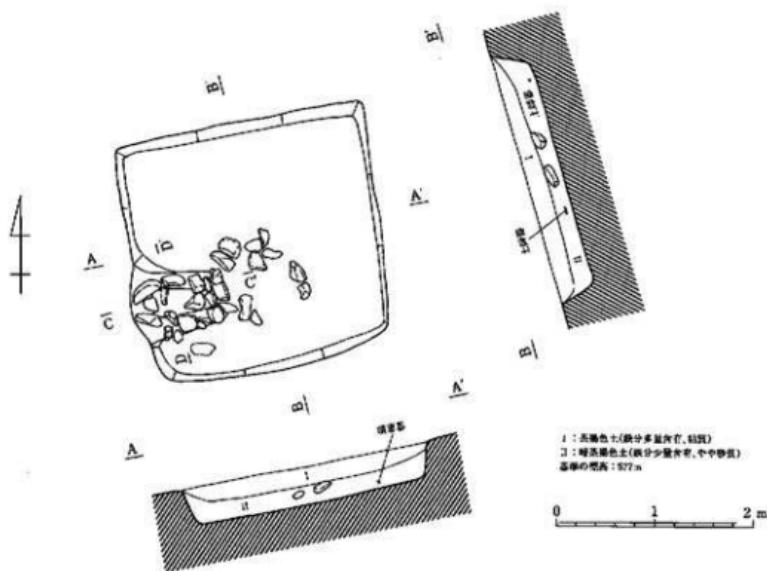
1は須恵器环片の腹部下半である。底は回転糸切りである。胎土は悪くがさがさしており、作りは悪い。須恵器としたが時期的には下ると思われる。2・3は上師器で2は内黒の环である。外面に何段ものロクロ整形の跡を残す。3は小形甕で口縁部以外は細かいはけ目がつく。器厚は2mm強と薄く、外面一部は黒色化している。4~8は須恵器环で何れも回転糸切り底である。5・6とともに外面にロクロ成形の段を細かく残し、底部内側は5は平らで、6は持ち上がって溝文を残す。7・8はともに底部片である。5~8の胎土には白色の砂粒を含んでいる。9~11は环であるが、10のみが土師器である。10は内黒で内外ともに滑らかに仕上げてある。9・11は5・6等と同じように何段もの棱をもつもので、9は薄く、11は内外ともに茶色をおびている。



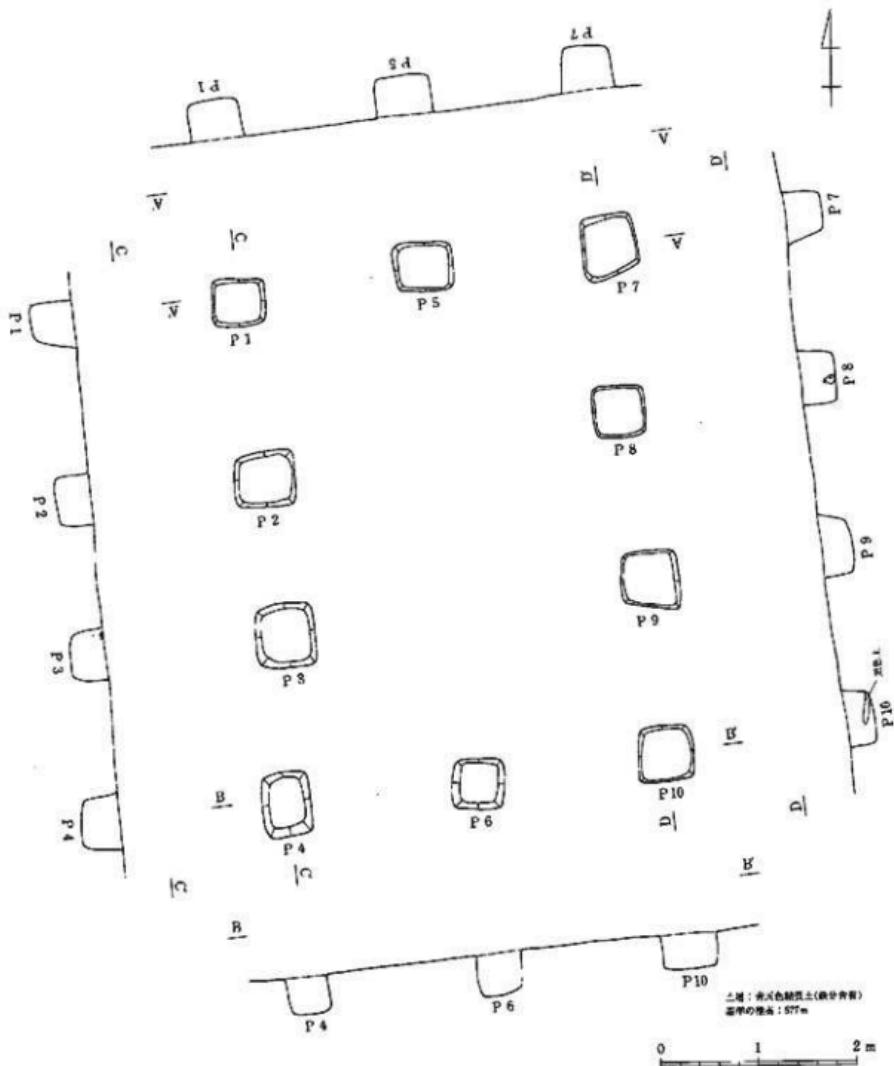
第1号住居址



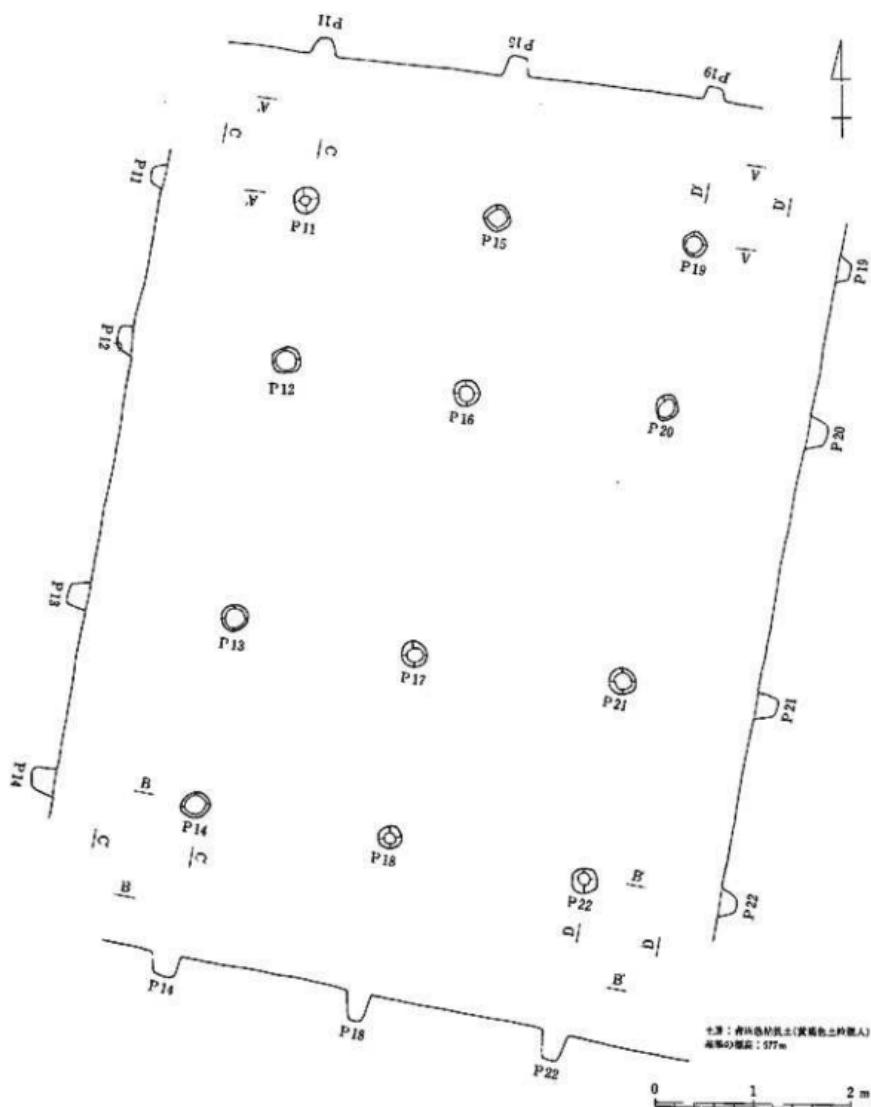
第6図 第1号住居址・墓址



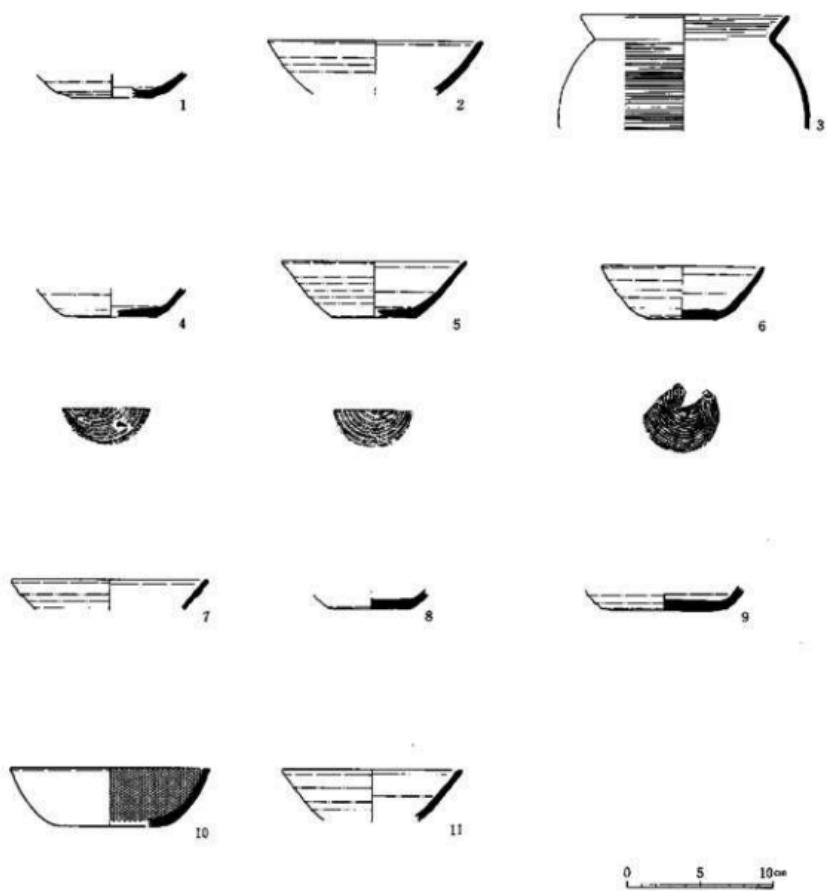
第7図 第2号住居址



第8図 建物址1



第9図 建物址2



第10図 出土土器実測図

遺構一覧表

遺構名	番号	位置	主基	平面形	東側(cm)		柱穴数	柱穴裏面(cm)		柱マド 底	直物	備考
					長横×短横	地方法		長横×短横	深さ			
住居住	1	1区	N 14° E	不整長方形	280×220	13	0			不明		立柱を切る。
	2	田区	K 9° W	長方形	260×254	40	3			西端	1, 2, 3	カマドは石で構築。
建物址	1	田区	N 6° W	長方形	520×390		10	1	54×48	45		
					390×390			2	61×56	36		
								3	66×60	37		
								4	66×49	40		
								5	60×51	41		
								6	51×32	44		
								7	60×56	46		
								8	52×52	36		
								9	59×56	31		
								10	58×58	28		
2	田区	N 9° E	長方形	556×404 380×284			12	11	18	25	14	
								12	*	26	15	
								13	*	28	21	
								14	*	30	25	
								15	*	28	18	
								16	*	25	26	
								17	*	29	30	
								18	*	23	22	
								19	*	24	12	
								20	*	25	20	
								21	*	27	22	
								22	*	25	18	
墓址	1区	N 74° W	長方形	(100)×40	4							柱穴の内側作成。
ピット	23	田区	H	B	8.20		14					
	24	*	*	*	28×24		19					
	25	*	*	*	18.22		19					
	26	*	*	*	26×22		14					
	27	*	*	*	26.30		21					
	28	*	*	*	18.30		20					
	29	*	*	長方形	50×10		28					
	30	*	*	円	60×59		5					
31	田区	N 9° E	長方形	18.20	28							

土器觀察表

No.	出土場所	種別	器形	寸法			外觀	内觀	成形・変形・形態の特徴			備考	
				口径	底径	高さ			外觀	内觀	内觀		
1	2区	燒土器	环	—	(5.6)	—	15	底灰	質灰	コクロナア	外觀斜面切り	ナゲ内面	共3
2	*	七脚器	环(内周)	14.72	—	—	15	底灰	黑	*	*	*	口丸
3	*	*	小豆莢	14.2	—	—	140	茶褐色～褐	茶褐色	ロクロイア	内外斜面切り	口縁表ナゲ	共3
4	ピット3	燒土器	环	—	6.3	—	底	底	底	*	*	*	共3
5	I地区内	*	*	12.6	5.8	3.9	53	底	底	*	*	*	共3
6	*	*	*	11.0	4.9	3.7	60	底	底	*	*	*	共3
7	*	*	*	13.4	—	—	6	底	質灰	*	*	*	共3
8	*	*	*	—	—	5.7	27	底	底	*	*	*	共3
9	*	*	*	—	(8.6)	—	46	底	底	*	*	*	共3
10	*	土師器	环(内周)	13.75	(7.23	4.6	20	質灰	質灰	*	*	*	共3
11	統出草	燒土器	环	(12.4)	—	—	19	茶褐色	茶褐色	*	内外	口縁内側ナゲ	口縁ナゲ

第4章 調査のまとめ

島内地区内での県営は場整備にかかる遺跡の発掘調査は、昭和58年度より引き続き行われております、本年度が第3年次である。今回調査の遺跡は島内遺跡群の最も北西にある上平瀬地区内にあるが、第1年次は巾上・古御堂周辺、第2年次は北方・南中の一部であり、少しずつ北側へ移動してきている。

島内地区内の遺跡については周辺遺跡の項で、地元の大久保知巳氏が詳述しているので重複はさけるが、本遺跡は勘左衛門堀のすぐ北側にあり、水田の床下に折、多量の遺物の出土をみたという田圃の東側にある。

島内地区は江戸時代には松本藩領の安曇郡成相組に属しており、平瀬は中世は平瀬郷で、天正検地の際、上・下平瀬と分かれたといふ。

勘左衛門堀は貞享元年より掘り始め、一度開通したがその後廃絶し、享保14年、天明6年等再度工事をしたが、後何度も改修して、寛政11年の掘り直しによってようやく通水した。取水は奈良井川の島立荒井の小麦渦とし、島内から梓川の川底を通って穗高組境まで延長約3里27町である。このような江戸時代の人々の努力の結晶も、何ら調査されることもないまま、新しい水路に生まれ変わりつつある。

さて、遺跡自体についてであるが、前項記述のとおり、竪穴住居址2、建物址2、墓址1と、調査面積の割合には遺構が少なかった。また遺物の検出も少量である。時代は平安時代と、江戸時代のものであるが、今まで床下によって出土した遺物とは同時期であった。遺構そのものについては住居址内で10~20cm大の自然石が床面よりやや深い位置で10数箇検出された。これは明らかに住居址の廃絶後投げ込まれたものであり、昨年調査の北方遺跡、南栗遺跡でも同様例が見出されるので、住居址を遺棄した後の扱い方に一つの風習が存在したのかも知れない。もう一つ問題として残るのは2軒の竪穴住居址がともに3m未満の長方形・方形プランを示すもので小規模である。数が少ないがこれを平均すると、 $2.70 \times 2.37\text{m}$ で面積は 6.40m^2 となる。これを昨年調査した北方遺跡の同時期の住居址6軒を平均すると、 $3.92 \times 3.87\text{m}$ で、面積は 15.17m^2 となる。同じく昨年調査した島立・南栗遺跡のうち、平安時代の住居址のみ抽出した53軒の平均は $3.88 \times 3.83\text{m}$ で、面積は 14.86m^2 となる。つまり、平均的には $3.87 \times 3.87\text{m} = 15\text{m}^2$ あたりであろう。それに対すると本址の住居址が極端に小さいことが判然とする。この設問自体が例示数が少ないとあるので小規模住居址の存在理由は推定の域を出ないが、柱穴はなくても一応カマドがあるので、人の居住していたことは確かであり、当然のことながら、小面積しか必要としない家族構成、あるいは傭人の居住したものかなどが考えられるが、そうなれば当時の社会構造についても考究しなければならないため、ここでは論

を止める。

本遺跡を総括してみると、やはり遺跡の中心をはずれていたため遺構の検出が少なかったといえよう。中心は勘左衛門塙を隔てた現集落あたりではないだろうか。

本遺跡のまとめとして簡単に記したが、本調査を行うにあたって関係機関は勿論のこと、地元公民館・土地改良区の方々にはお世話になった。更に寒風の中調査に当られた調査員、作業員の方々にもお礼申し上げる。なお昭和61年度も島内地区内において発掘調査が計画されているので資料の増加が考えられ、これらによって更に古代史解明が進められる事を期待する。

図 版



全景



第1号住居址



墓址

圖版 I I 地區全景・遺構



全景



第2号住居址
礎の状態



掘り上げ

図版2 III地区全景・遺構



第2号住居址カマド
上面



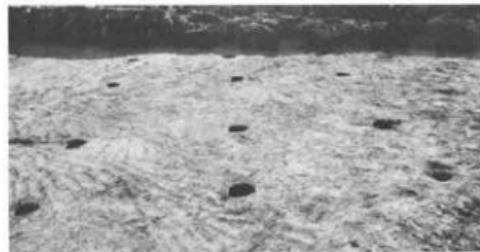
前面



側面



建物址 1



建物址 2



全景

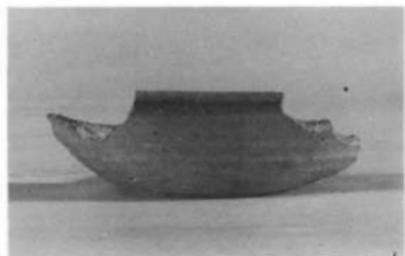
图版 4 Ⅲ地区遗構・Ⅳ地区全景



3



5



6



6. 底部



8 7 10
4 9
1 11 2

第5図版 出土遺物



建物址 1



建物址 2

松本市文化財調査報告No.41
—松本市鳥内遺跡群緊急発掘調査報告書—

昭和61年3月20日 印刷

昭和61年3月31日 発行

発行 長野県中信上地改良事務所
松本市教育委員会
印刷 株式会社 総合印刷所

